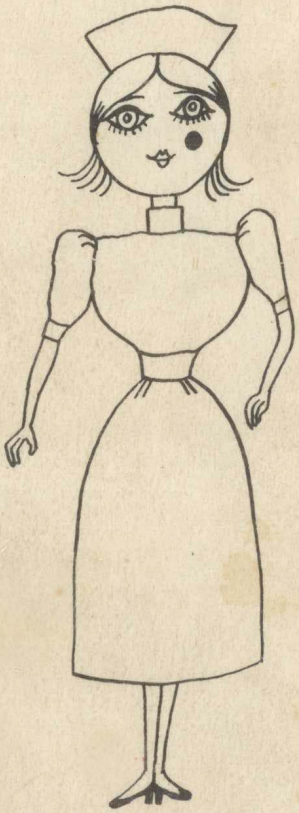
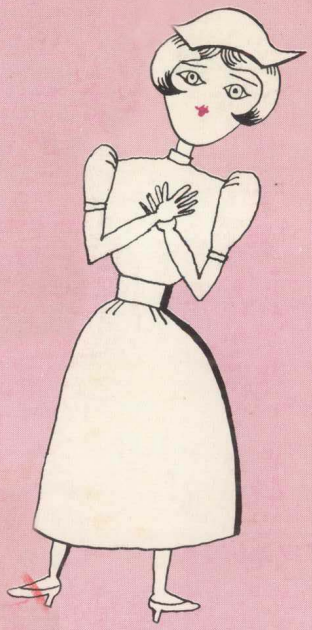
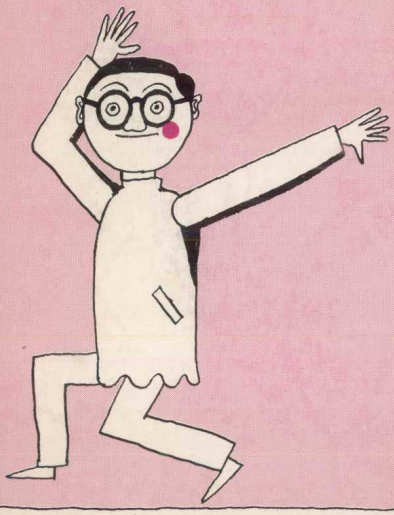


頭医者事始

あたまいしゃことはじめ

加賀乙彦





頭医者事始（あたまいしやことはじめ）

一九七六年五月一〇日　印刷
一九七六年五月二〇日　発行

著者　加賀乙彦
編集人　桑原隆次郎
発行人　伊奈一男
発行所　毎日新聞社
〒一〇〇東京都千代田区一ッ橋
〒五三〇大阪市北区堂島上
〒八〇二北九州市小倉北区紺屋町
〒四五〇名古屋市中村区堀内町

印刷　中央精版
製本　佐久間製本

© OTOHIKO KAGA Printed in Japan 1976

頭医者事始（あたまいしゃことはじめ）　目次

1 船医とハレムの夢 7
2 教授の念力 18
3 旗本行列 29
4 大学者は豚汁をたべる 45
5 ファブリス・デル・ドンゴ 57
6 革命と鼠とオシッコ 69
7 イカ人間か、蛾人間か 88
8 エロ小説に感動す 98

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

9 元陸軍少佐殿 110
10 金縁眼鏡の性的効用 123
11 病院炎上 148
12 狂躁病棟の住民たち 169
13 顔見世興行大歌舞伎 189
14 ふたたび春は巡り来る 204
あとがき 221

装幀と挿画　畑農照雄

頭医者事始（あたまいしゃことはじめ）

1　船医とハレムの夢

おれがT大学の医学部を卒業したのは一九五三年の春だ。つまり戦後八年目で、その頃はまだインターンというアメリカ式の研修制度があり、卒業後一年間、病院で各科をまわって臨床の勉強をすることになっていた。インターンをおえると医師の国家試験があり、それに受かるとやっと専門科に分れて医者としての第一歩を踏み出すことになる。ところでインターンの末期に何科を選ぶかという段になっておれは大いに弱った。学生時代からはっきりとした目標を立てていなかったし、その場になれば自然に決心がつくだろうと高をくくっていたのが期日が迫ってもさっぱり決心がつかなかった。ほかの者は自分の行く科をさっさときめている。外科では入局者が三十名決定し、四月一日から病院に出ることになっているとか、産婦人科の入局者たちは先輩に連れられて吉原探訪

をすませたとか噂を聞く。出会った同級生の誰にきいても科が未定な者などいない。

そりゃ漠然とした方針ならおれだって立っていた。つまり、みんながあまり行かぬ科に行くという消極的方針である。ところで同級生の少ない科をひろってみると、歯科、泌尿器科、耳鼻咽喉科など細かい技術を必要とする科ばかりで、生来大ざっぱな性格のおれにどうもぴったりする科ではない。困っていると、大学病院を見限って結核予防会に行くときめた男が誘いにきた。当時結核の死亡率は高く、難病中の難病とされていたので、この誘いには心動いた。一晩考えた。ほとんど行く気になったのだが明け方夢を見た。船医になった自分が世界各国を旅している。アラビアのハレムに招待され、数百人の美女に囲まれて、体に香油をぬってもらったり、クジャクの羽であおいでもらったりしている。

「やめた、外科にいく」と言うと結核予防会が笑った。「お前、大勢がいく科はいやだって言ってただろう。外科は三十人いくんだぞ」「いや本院の外科じゃなく、分院の外科にいく。分院の希望者は一人もいないだろう」「そりゃそうだが、なぜ急に外科なんだ」

まさか、アラビアのハレムに招待されるため船医になり、その船医になるために外科をやるとも言えないから、死んだ祖父が外科医で、その血筋でおれは外科医志向性があるんだと答えた。これはまんざら嘘ではない。いや、第一船医の夢を見たのは祖父の連想かも知れぬのだ。

祖父は三田の慶応裏で、腕のある外科医としてはやっていた。長州のしがない漁師の八男で、上京して牛乳売りなんかをして苦学し、月謝がただという理由で海軍軍医学校に入った。日本海海戦

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

のときは戦艦八雲の軍医で、当然山なす死傷者の手当をし、おかげで大いに腕をあげ、戦後開業してからは今様に言って救急専門医として名声をあげたのである。汽車だの馬車にはねられて、ほかの医者が蒼くなって断るような重傷者を、祖父は平気で引受けた。幼い頃、祖父のところへ遊びにいってると、戸板に乗せられ、わっしょいわっしょいと運ばれてくる血だらけの人をよく見たものだ。いったいどの程度の率で命を救ったのかそこは知らぬ。しかし、到底助かりそうもない負傷者を、てきぱきと看護婦を指揮しながら手術室へ送りこむ祖父のさっそうとした姿は忘れられぬ。

待合室には戦艦八雲の精巧な模型が置いてあった。暇があると祖父は孫に日本海海戦の話をした。軍医である自分が立派な一室に住み、艦長と対等に話し、いや、艦長が下痢したときは、御馳走を三日間禁止し特効薬をのませた話をよくした。

「ふむ、おじいさんはな、艦長が絶食しとる三日間、艦長用の御馳走を自分の部屋に運ばせてな、くった。なにしろ戦艦の艦長だからな、大した御馳走だぞ。下痢がなおってからは艦長は、ごほうびにおじいさんに自分と同じ御馳走をたべさせることにしおった。そしたらおじいさんはな、栄養がいいもんだからふとりおって、軍服が着られんわいな。それで毎日体操だぞ。逆立ちもやったぞ。それでまたやせた。なあ、だから今でもうまいんだぞお」

小柄な祖父は、ひょいと逆立ちしてみせた。ひげの間から色白の肌がのぞいていたが、それを真っ赤に染めて、数歩歩いてみせる。院長先生の逆立ちというので看護婦も患者も喜んで見ている。むろん、孫は大喜びだ。

祖父は、外科医としての自分の腕に自負があったから、メスは代診に絶対とらせなかった。いかなる手術でも自分が執刀し、代診は傷口押えの鉤を引くだけであった。あるとき虫垂炎になった。頑として自分で自分を手術するといってきかない。代診、祖母、婦長連が近所の外科医を頼むように懇願したが、祖父はあんな野郎は人力車にかすられた傷さえなおせない、腕無しのノータリンだとののしるばかりだ。そのうち痛みがひどく祖父はうなり出した。早くしないと命があぶない。祖父は自分で自分を麻酔し、メスで切腹し、自分の腹に指をつっこんで腸をひっぱり出したまではよかったが、そこで貧血をおこし、代診が見かねて先生かわりますと言うのに、なにを貴様代診のくせに失敬なと怒鳴りつけ、脂汗を流しながらついに手術を完了し、自分で自分の腹を縫いおわったところで気絶した。

おれは自分が祖父のような名医になったつもりで力みながらバスの停留所に待っていた。分院の外科医長に医局の様子をきく言葉をあれこれ考え、船医の募集がどの程度あるか聞きもらさぬようにせにゃいかんと自分にうなずいているところへ、一年先輩で精神科に入った成神が来た。成神とは、学生時代、一緒にセツルメント運動をした仲であるが、インターン中はこちらが忙しく一年間ほど会わないでいた。彼はおれが分院の外科に入局するつもりで、今から偵察に行くところだと言うと首を傾げた。

「何で外科なんかやるんだ。外科なんかサディストのやる職業だぞ。フロイトがちゃんと証明してらあ」

「そうかなあ」

「そうとも、そんなの常識だよ。やめろ、やめろ。なに、分院の外科医長に電話で予約してある。そんなら電話で断りゃいいだろう。断ってやろうか」

成神は共産党員で美男子で、ということは美男子の外観には不釣合いな、隙間のない整然とした弁証法的唯物論的論理を使う男で、おれが何か言おうとしているうちポンポン言い、おれはいやも応もなく地下の喫茶室に連れこまれていた。彼は計器会社の社長の息子で、非プロレタリアート的な育ちのよさから坊っちゃん風の強引なところもあるが、根は親切な男で、セツルメントでは労働者街のおばさんたちの信頼を得ていたし、学生仲間ではリーダー格で、たまたま手伝いに来た女子医大のお嬢さんがたをうまく統率し、中でも一番の美人で才媛と恋愛し、結婚した。おれは彼の奥さんの顔を思い出しているうち、ひとつざっくばらんに相談してみようかという気になった。仲間が評判にしていたあれほどの才媛を手に入れた能力にちょっぴり敬意をおぼえたせいである。

「精神科てのはそんなに面白いもんかしらん」と疑い深げにおれが言うと成神はたちまち刺戟され、精神医学の面白さを雄弁に解説しだした。あらゆる医学の中で現代の最尖端をいくのが精神医学である。精神病の原因も治療法もまだよく分っていない。精神医は、そりゃ外科医のように悪い組織を切り取って縫い合せりゃおわりというふうにはいかぬ。しかし、研究テーマはうんとあるし、治療だって難病だけにやり甲斐がある。レーニンだってスターリンだって精神医学には深い関心をいだいている。

おれはレーニンとスターリンのところはのぞいて大体納得が入り、精神科も悪くはなさそうだと思った。しかし、なお解決すべき諸点がある。

「精神科に入って船医になる人いるかな」

これは愚問だった。成神は、船医に対して一種の偏見をいだいており、精神科は船医などになるような下等な科ではないと力説した。

「安心しろよ。現今、精神医はあらゆる病院で不足しててな、引手数多だからな、どこでも高給でやとってくれ、絶対に船医などにはならんですむ」

「そうですか」おれは溜息をつき、次の質問に移った。「こんど、クラスの者が何人入局するかが問題なんです。そのう……」

「安心しろよ。きみたちのクラスは七人も来るって話だぜ。そのほかに学外から四人、計十一人の大量入局さ。おれたちの時は五人で、それでも史上空前の大量入局と言われたんだが、きみたちはその二倍だな。やっぱり精神科は見直されてるんだよ。なあ、なにも心配することはねえな。来いよ。きみはいったい何に興味があるんだ」

「興味って……」

「まさか、ただの精神医になるわけじゃなかろう。ちゃんと研究して精神医学の進歩に貢献せにゃならんだろう。研究方法としてどういう方面に興味があるかって言うんだよ。たとえばさ、脳を顕微鏡で調べる脳病理学、電気的に調べる脳波学、おれがやってるのは神経生化学で一等新しい分野

だ。それからまだ一杯あるよ、精神病理学、臨床心理学、犯罪学、きみは何に興味があるんだ」
「まだわかりませんね」まさかアラビアのハレムに興味があるとも言えず、といって全く学問に無関心と告白するのもシャクなのでおれは思いつきを言った。「でも、犯罪学なんて面白そうだな」
「犯罪学か」成神は急にがっかりした様子で「あれはちょっと学問としちゃ古いな。心理学をつかうだろ、あれは方法が古いんだよ。おれのやってる生化学は、そこへ行くと新しいんだな。ちゃんと対象が計量できるしな。おれと一緒に生化学をやれよ」
「でも、まだ」おれは事態を明確にすべきだと自分を励ました。「ぼく、精神科に入ると決めたわけじゃありません」
「あ、そうか」成神は金縁眼鏡の中で急に柔和な目付きになった。整ってはいるがややきつい顔付きの彼は、この金縁眼鏡をかけるようになってからチェホフさながらのやさしい顔付きになったので、それで女子医大のお嬢さん連がいかれたふしがある。
「そうだね、きみ」成神は保険勧誘員のように猫撫で声になった。「まず入局を決めることだね。研究なんかあとでいいさ、なに、犯罪学だって捨てたもんじゃない。面白いよ」
おれは正直な彼の反応に心暖まる思いで、学生時代、一緒に川崎や亀有（かめあり）の労働者街に泊りこんで活動したことをなつかしく思い出した。
「奥さん、お元気ですか」
「奥さん、誰の」成神は不審顔になった。

「もちろん成神さんのですよ。美人の奥さん」
「だって」彼は笑い出した。「ぼくはまだ結婚してないんだよ」
「あれえ、そう聞いたがなあ」おれは情報を伝えた結核予防会の生真面目な顔を思い出した。
「いや、婚約はしたけどね。まだ無給医局員じゃくえないしね。何しろ精神科てのはつぶしがきかないからねえ」
「へえ」おれは彼の言い分が矛盾してることにおそれいり、からかってやろうと思ったが、おれよりもさすが彼のほうが、素早く反応した。
「いや、精神科への偏見は内科医あたりで強くてね。総合病院でも精神科だけないってのが多いのが現状だけどね。それは言いかえれば将来精神科を新設するってことで将来性があることを意味するね。それに医局員が少ないから、はやく順番がまわってきて無給医局員の期間も、ほかの科にくらべると短くてすむ。関係病院へパートでアルバイトっていう手もあるしね」
「まあ何とかくえますか」
「ああ、くえる、くえる」
弟が三人もいて、学生時代学資はアルバイトでかせいできたおれは、貧乏には慣れている。金がなければ働けばよいという楽天性も備えていた。おれは成神を信じた。無給医局員でも何とか働く道はあるだろう。要するに何とかくえれば充分だった。その晩、おれはまた一晩考えた。もともと人間の精神という現象には興味があった。高等学校時代は、小説や哲学に熱中し、その年頃の少年

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com